『よしなしごと』の〈聖〉と〈俗〉

井上新子

はじめに

堤中納言物語中の一編『よしなしごと』は、弟子にあたる娘へあてた師僧の無心の書簡が作品の大半を占める、異色の物語である。往来物の形式内容や、『玉造小町壮衰書』・『新猿楽記』等に見える物の名の列挙形式との類似が、先学によりすでに指摘されている。[1] もっとも、『よしなしごと』では、師僧がこの書簡を書くにいたった経緯が書簡の書写者の語りを通して明かにされており、この点が独自の趣向となっている。その設定とは、「故だつ僧」が密かに通じる娘から山籠もりの具を調達したことを知った師僧が、自らも借り受けようと手紙を書くという一風変わった事情である。こうした書簡を包む、いわば枠組みの存在がこの作品を物語たらしめているといえる。よって、本作品世界の考察には、この枠組みと書簡との関わりの検討が一つの重要な作業となってくると思われる。

この枠組みと書簡の内容をめぐっては大きく二つの問題が存しよう。一つは師僧の書簡の意図、意味合いをどう読むのか、もう一つは枠組みの機能をどう捉えるのかという問題である。まず前者を確認する。雨宮隆雄氏は書簡を「無心のための無心の書状」とし、書簡が実は物品請求という実利を目的に執筆されたのではないことを明かにし、「女への窘めと故だつ僧への非難」を読んだ。[2] また小峯和明氏は「故だつ僧と娘への諷刺、揶揄」を見る。[3] 枠組みと書簡の内容とを勘案すると、こうした師僧の、娘及び故だつ僧への揶揄や諷刺、非難の精神を書簡の文面に見て取ることはほぼ妥当であろう。ただし現在、書簡中の文言個々についての表現意図が、その文学的背景を踏まえた上で十分に検討されているとは言い難い状況にあると思われる。よって本稿では、枠組みと直接関連すると推定される文言、具体的には娘と故だつ僧の秘密の関係を背後に想起させる文言について指摘し考察を加える。これが本論の一つの柱である。

次に枠組みの機能を見ておく。この問題を考える際、とりわけ重要となるのは物語末尾の読み取りであろう。神田龍身氏は書簡の書写者を「窃視者」と捉え、末尾をこの「窃視者」が「自らの意図を韜晦」した言辞と位置づける。[4] 一方、小峯氏は末尾を同様に書写者のことばと捉えつつも、「虚構をより徹底させるための述懐」と解した。こうした見方に対し、三谷邦明氏は末尾を師僧の書簡の一部と捉え、書簡を「出されなかった手紙」、「退屈を慰める戯文」と解釈することで、末尾においてこれまでの語りの枠組みそのものが崩壊するとし、「書写者までもを弄んでいる戯作者の姿が浮かび上がってくる」と述べる。[5] 同様の問題を、小森潔氏は「ゲーム」と「コミュニケーション」の視点から捉えた。[6] 視点の異なりが読みの世界を豊饒にしている。ただし一方で、出発点となる本文の理解がいまだ十分に検証されていないのではないかという思いも抱く。本稿では表現の背景を探り文脈理解に努めることで、枠組みの機能について考えてみたい。これがもう一つの柱である。

さらにこの二点をふまえ、作品世界を支える背景について考察し、本物語の趣向ひいては特質の一端を明かにすることが本論の目的である。

一　冒頭の枠組みの下限とその機能

まず、冒頭の枠組みを確認する。

人のかしづくむすめを、故だつ僧、忍びて語らひけるほどに、年のはてに、山寺に籠るとて、「旅の具に、筵、畳、盥、半挿貸せ」と言ひたりければ、女、長筵、何かや、一つやりたりける。それを、女の師にしける僧の聞きて、「われも物借りにやらむ」とて、書きてありける文の言葉のをかしさに、書き写して侍るなり。似つかず、あさましきことなり。[7]（「よしなしごと」）

「人のかしづくむすめ」を「故だつ僧」がこっそりと懇意にしており、年の暮れに山寺へ籠もるというので、「旅の具」として、「筵、畳、盥、半挿貸せ」と言ってやったところ、女は一揃い用立ててやった。それを「女の師にしける僧」が耳にして「我も物借りにやらむ」と書いた手紙の言葉のおもしろさに書き写したのだ、とまず書写者によって書簡の書写経緯が明かにされる。この部分の書写者のことばとあとに続く師僧の書簡との境界をめぐっては、意見が分かれている。書写者の言を「似つかず、あさましきことなり。」までとするか、[8] あるいは直後の「唐土、新羅に住む人、さては常世の国にある人、わが国には、やまがつ、品尽のこひ麿などや、かかることばは聞こゆべき。それだにも。」までとするか。[9] である。両者とも可能性が存する。が、師僧の書簡は様々な地名・品名が飛び交い、想像力が壮大に広がる書き様であり、その傾向と「唐土、新羅に住む人、さては常世の国にある人」以下の表現の特色が似通う。よって、「似つかず、あさましきことなり。」までを書写者の言、

そのあとの「唐土」以下を書簡部分と解する。この場合、「唐土」以下は師僧の謙辞と捉える。

書写者は自らが書簡を写す理由を、「文の言葉のをかしさ」のためと記した。この言は、以下に引用された書簡の読みを誘導する機能も有する。読者に「文の言葉のをかしさ」への着目を要求するのである。続く「似つかず、あさましきことなり」、つまり僧の書簡としては似つかわしくなくあきれたことです、という書写者の師僧への皮肉は、一方で荒唐無稽な書簡に接し生ずるであろう読者の非難を先取りし封じ込め、読者の読みを「言葉のをかしさ」に収斂させるためのしかけであるとも捉えられる。

ところで、当該部分には「書き写して侍るなり」とあり、「侍り」が用いられている。これはある特定の読み手を意識した物言いとも考えられるが、続く書簡部分との関係から使用されたとも解されよう。物語にはそれまで語られてきたストーリー部分に続き、物語を書き写した人物のことばを記す末尾表現が付されることがある。例えば『思はぬ方にとまりする少将』の末尾、

かへすがへす、ただ同じさまなる御心のうちどものみぞ、心苦しうとぞ、本にも侍る。劣りまさるけぢめなく、さまざま深かりける御志ども、はてゆかしくこそ侍れ。なほ、とりどりなりける中にも、めづらしきは、なほたちまさりやありけむに、見なれたまふにも、年月もあはれなるかたは、いかが劣るべきと、本にも、「本のまま」と見ゆ。

は、この物語の内容に関する書写者の感想を本文に刻む。恐らく作者の所為と考えられ、手の込んだ枠組みがかたちづくられている。ここに、「侍り」が用いられたことは注目される。「侍り」の使用によって、物語のストーリーを綴る部分とは異なる文体が形成されている。こうした「書写者のことば」に通じるのが、『よしなしごと』冒頭の書簡の書写者の言に見える、「侍り」を用いた文体ではないか。『よしなしごと』においては書写者の言が、他物語に比してより詳しく、しかも冒頭に記されることによって、以下の本文内容の読みを左右する機能をも有するにいたったと捉えられよう。

二　師僧の書簡のしかけ（一）

こうした冒頭をうけ記された師僧の書簡を次に検討する。師僧の書簡には、日本国内・外国・空想上の地名、高級品・粗悪品・架空の品まで、幅広い地名・品名が登場する。その言葉遊びのおもしろさや並べ方の妙については諸注により指摘があるので、本稿では先に述べた通り、枠組みで紹介された娘と「故だつ僧」の関係を背後に想起させる文言に絞って検討を加えたい。[11]

まず、書簡の冒頭を見る。

唐土、新羅に住む人、さては常世の国にある人、わが国には、やまがつ、品尽[7]のこひ麿などや、かかることばは聞こゆべき。

それだにも。[ロ]すだれ編みの翁は、かしたいしのむすめに名立ち、賤しき中にも心の生ひさきはんべりけるになむ。[ハ]それにも劣りたりける心かなとは思すとも、わりなきことの侍りてなむ。

（『よしなしごと』）

〔イ〕以下に着目する。「品尽のこひ麿」は恐らく本作品の造語らしく、品物が尽きる意の「品尽」に名前風の「こひ麿」が付加されたと推定される。「こひ麿」の「こひ」には、「恋」あるいは「乞」の字が当てられ解釈されている。[12]が、ここはこの二つの掛詞として読めるのではないかと考える。この人物名は、品物がなく物乞いをする恋に夢中の男、という意に解されよう。そんな人物だったらこんな言葉を申し上げるでしょうが、とはじまる前置きは、娘に旅の具を依頼した「故だつ僧」を多分に意識した物言いである。

続く〔ロ〕も、これと同様の戯れと見る。「すだれ編みの翁」・「かしたいし」の典拠は不明だが、「すだれ編み」の方は以下の用例、

・『吉記』承安三年（一一七三）七月九日条

未明御簾編等、令召遣成長許畢、今日内令編出料也、[13]

・『鶴岡放生会職人歌合』

七番　右　　御簾編

夕まぐれこすの間とほる月影はくまなきよりもあはれなるかな[14]

に見える「御簾編」と同様の職人であろうと推定される。それは竹取の翁のような卑賤の人物であったと考えられる。その「すだれ編みの翁」なる人物が「かしたいしのむすめ」に浮き名が立ち卑しいながら将来の悟りの望みがあったという話は、「故だつ僧」と娘の恋愛を対照し浮き彫りにするために引かれていよう。続く〔ハ〕は直接には「すだれ編みの翁」にも劣るとする師僧の謙遜の言辞であるが、「故だつ僧」をも意識した物言いになっているのではないか。師僧は自らを卑しめる文言を連ねると見せかけつつ、「故だつ僧」と娘の関係を連想させるしかけを用意し婉曲に揶揄を重ねている。

師僧の隠遁への思いが記された後、書簡はいよいよ無心の用件に入る。

まづ、いるべき物どもよな。（略）畳などや侍る。錦端、高麗端、繧繝、紫端の畳。それ侍らずは、布べりさしたらむ破れ畳にてまれ、貸したまへ。[イ]玉江に刈る真菰にまれ、逢ふこと交野の原にある菅菰にまれ、ただあらむを貸したまへ。[ハ]十布の菅菰な賜ひそ。筵は、荒磯海の浦にうつるなる出雲筵にまれ、生の松原のほとりに出で来なる筑紫筵にまれ、みなをが浦に刈るなるみつふさ筵にまれ、そこいる入江に刈るなる田並筵にまれ、[ニ]七条の縄筵にまれ、侍らむを貸させたまへ。全きなくは、破れ筵にても、貸させたまへ。

（『よしなしごと』）

〔イ〕は玉江で刈る真菰の粗筵であるが、以下の『萬葉集』歌にはじまる歌の伝統に根ざした和歌的表現でもある。[15]

（寄レ草）

三嶋江之　玉江之薦乎　従二標之一　己我跡曽念　雖レ未レ刈

（巻第七譬喩歌、一三四八番）[16]

この「三嶋江の」歌は『拾遺和歌集』（巻第十九雑恋、一二一二番）にも載り、こちらでは第二句中の「こも」が「あし」となっている。また、『袖中抄』や『井蛙抄』には引用本文のかたちで引かれている。流布の本文の形態に問題が残るものの、少なからず人口に膾炙していた歌であろうと推察される。当時[17]の読み手とりわけ和歌の世界に通じた読者たちは、物語本文から当該歌を想起した可能性が高いのではなかろうか。引用歌は、「三嶋江の玉江の薦」に標識をして以来、我が者と思っている、まだ刈ってはいないけれども、という意で、「三嶋江の玉江の薦」が愛する女性を象徴し、「苅らねど」はその女性とまだ男女の契りを結んでいないことを指す。この歌語の世界を念頭に置くと、物語本文の「玉江に刈る真菰」からはすでに男性と通じた女性という連想もはたらく。

同様に、〔ロ〕も歌語の世界と密接に関わる。以下の『後撰和歌集』歌、

えがたう侍りける女の家のまへよりまかりけるを見て、いづこへいくぞといひいだして侍りければ　藤原ためよ

逢ふ事のかたのへとてぞ我はゆく身をおなじなに思ひなしつつ

（巻第十三恋五、九一七番）

の例からも導かれるように、「逢ふこと交野」は河内国の地名「交野」に「逢ふこと難し」の「かた」を掛けており、[18]逢いがたい女性を想起させる。書面は「菰」を所望する文言でありながら、女性の所望をも連想させるしかけが施されており、師僧の娘に対する挑発が透けて見える。

続く〔八〕は、『袖中抄』や『俊頼髄脳』に載る以下の歌を踏まえる。[19]

みちのくのとふのすがごもななふには君をねさしてみふにわれねん

（『袖中抄』第十四）

「ななふ」にいとしい人を寝せ自らは「みふ」に寝ようとあり、共寝用の広い薦であったことがわかる。修行の旅なのでそんなものは不要、とふざけた。ちなみに、同歌の影響を受けた歌が院政期から鎌倉時代にかけて散見する。

・『久安百首』、二七五番

（恋二十首）　（参議左中将教長卿）

君待つととふのすがごもみふにだに寝でのみあかす夜をぞ重ぬる

・『後鳥羽院御集』、八八九番

（冬五十首）

ねざめするとふのすがごもさえわびて暁ふかく千鳥鳴くなり

「みちのくの」歌に詠み込まれた「十布の菅菰」の和歌世界における連想は、平安の終わりから鎌倉にかけての歌人たちの中に少なからず浸透していたと考えられる。書簡の文言はその連想を活用することで、師僧の、娘への下卑た戯れを演出している。

次に、〔二〕を見る。「七条の縄筵」の用例は管見に入る限り見

出せない。が、「九条むしろ」であれば時代はかなりくだるものの、以下の『七十一番職人歌合』歌において確認できる。[20]

こひしさのこころものべぬひとりねは九条むしろもせばからぬかな

（八番、右）

恋心も発散しないさびしい独り寝には「九条むしろ」も狭くはない、という意であろう。この歌によると、「九条むしろ」は独り寝用の狭い筵であったようである。「九条」は京の九条を指し、これを捩り「七条の縄筵」という品名が捻出されたと推定したい。地名の「九」を「七」に変え、数の減少にともない一層狭い筵を読者に連想させようとしたことば遊びであると考える。独り寝用の狭い「九条むしろ」よりももっと狭い「七条の縄筵」であってもこの際構わない、という意と読む。この物言いには、恋愛から隔絶された師僧の僻みの気分までもが揺曳していよう。ただし、もととなる「九条むしろ」自体が『よしなしごと』成立当時流通していたのか、あるいは「九条むしろ」に対して記したような連想がはたらいていたのか否か、甚だおぼつかない。手がかりが乏しく推定を重ねる憾みは残るのだが、以上記したように「九条むしろ」との繋がりを読んでおく。当時の読み手たちにとって、その蓄積している情報によって少なからず本文の理解が異なってくる文言であったのではないか。むしろ、様々に表現の意味を想像させるところにこそ、この物語の趣向の一つがあったのではないかと思う。

三　師僧の書簡のしかけ（二）

さらに師僧の書簡部分を考察する。

けぶりが崎に鋳るなる能登かなへにても、真土が原に作るなる讃岐釜にもあれ、石上にあなる大和鍋にてもあれ、筑摩の祭に[イ]重ぬる近江鍋にてもあれ、楠葉の御牧に作るなる河内鍋にまれ、[ロ]いちかどに打つなるさがりにまれ、とむ、片岡に鋳るなる鉄鍋にもあれ、飴鍋にもあれ、貸したまへ。（略）これら侍らずは、[ハ]やもめのわたりのいり豆などやうの物、賜せよ。

（『よしなしごと』）

〔イ〕は、『俊頼髄脳』や『伊勢物語』に記述の見える近江国の筑摩神社の祭りを踏まえた文言である。[21]祭りの日、女は関係した男の数だけ土鍋をかぶり奉納したという。この行事を念頭に『俊頼髄脳』に載る、

近江なるちくまの祭とくせなむつれなき人のなべのかず見む

（一四〇頁）[22]

が詠まれた。この歌は他に、『伊勢物語』百二十段や『拾遺和歌集』（巻第十九雑恋、一二一九番。初句「いつしかも」、第三句「はやせなん」）、『袖中抄』（第三句「はやせなん」）にも所収されている。当該歌の後世への影響は少なくないようで、例えば以下の詠歌が存する。

・『後拾遺和歌集』第十八雑四、一〇九八番

御あがもののなべをもちてはべりけるを台ばんどころより人のこひはべりければつかはすとてなべにかきつけはべりける　藤原顕綱朝臣

おぼつかなつくまのかみのためならばいくつかなべのかずはいるべき

・『六条修理大夫集』、六五番

七条にて人人あそびしついでによみし恋の歌

としもへぬつくまの神に事よせてなべのかずにも人のいれなん

「筑摩の祭り」をめぐる話題は、当時の人々にかなり浸透していたことが知られる。ところで、はじめにとりあげた『俊頼髄脳』歌は、筑摩の祭りによって自分に冷淡な女の男性関係を暴いてやろう、というものである。物語本文の「筑摩の祭に重ぬる」には、娘の男性関係を知りたいという師僧の屈折した欲望が込められているとも解されよう。

続く〔ロ〕を見る。『梁塵秘抄』に以下のような歌謡が載る。

楠葉の御牧の土器造、土器は造れど娘の顔ぞ好き、あな愛しやな

彼女を三車の四車の愛敬輦に打ち載せて　受領の北の方と言はせばや、

（巻第二、三七六番）[23]

「楠葉の御牧」は土器の産地であったことがわかる。「土器は造れど娘の顔ぞよき、あな愛しやな」からは、土器造りの娘が色香漂う評判の器量よしだったことが知られる。物語本文に、そうした娘ひいては女性一般への師僧の興味を想定するのは深読みに過ぎようか。

以上、書簡の文言には、表層における品物の無心という意味の層の底に、「故だつ僧」と娘の関係への揶揄や皮肉、娘への挑発、女性の所望といった師僧の屈折した欲望が隠微に塗り込められていると読んできた。その品物の列挙を締めくくるのが、〔八〕である。先学によってすでに指摘されているように[24]、「やもめ」は寡婦、「いり豆」は女陰の異称であることから、当該品名は卑猥な連想を喚起する。もっとも、「いり豆」は『新猿楽記』には酒の肴として登場する。

七の御許は、貪飯愛酒の女なり。好む所は何物ぞ。（略）、酒は濁醪、肴は煎豆。

（三二頁）[25]

こうした食品を取り上げつつ、一挙に猥雑な笑いがしかけられている。[26]ここまで燻り続けてきた師僧の欲望が下卑た露骨な挑発となって爆発したと捉えられよう。

このあと書簡はいったん常識を取り戻す。が、受け渡し人と場所を指定するに及んで、再び日常を逸脱し戯れの性格を帯びてゆく。続く本文を引用しよう。

いでや、いるべき物ども、いと多くはべり。せめては、ただ、足鍋ひとつ、長筵ひとつら、盥ひとつなむいるべき。もし、これら貸したまはば、こころならむ。人にな賜ひそ。ここに使ふ

童、おほぞうのかけろ二、うみの水のあら十いふ、二人の童べに賜へ。出で立つ所は、科戸の原の上の方に、天の川のほとり近く、鵲の橋詰に侍り。そこに必ず送らせたまへ。これら侍らずは、えまかりのぼるまじきなめり。世の中にもののあはれ知りたまふらむ人は、これらを求めて賜へ。なほ、世を憂しと思ひ入りたるを、諸心にいそがしたまへ。かかる文など、人に見せさせたまひそ。ふくつけたりけるものかなと、見る人もぞ侍る。御かへりはうらによ。ゆめゆめ。（「よしなしごと」）

まず〔イ〕に着目したい。風神を「級長戸辺命」といい、「大祓祝詞」では、

天の下四方の国には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、（四二五頁）[27]

とあることから、「科戸の原」は風の起こる場所をいったものと推定される。これと関わりのあるのが、『源氏物語』朝顔巻の光源氏のことば、

「あな心憂。その世の罪はみな科戸の風にたぐへてき」（②、四七四頁）[28]

であろう。後世ではあるが、当該箇所の『河海抄』の注、

つみとかはしなとのかせにまかせたりさすらへぬらん大海のはらに／東南の風を志那との風といふもろ〳〵の不祥を吹去ると云々（略）（一〇二頁）[29]

（御下集云）

をも勘案すると、「科戸の風」は一般に罪を祓い清める風として認識されていたと考えられる。娘と「故だつ僧」の禁忌の恋を念頭に置くと、物語本文の「科戸の原」には、彼らの「罪」を祓い清める風の吹く原、という連想もはたらくのではないか。禁忌の恋をめぐる「罪」を意識して配された文言でもある可能性が存しよう。

この「科戸の原」の上の方に、受け渡し場所〔ロ〕がある。「鵲の橋」は、例えば以下の『後拾遺和歌集』の後冷泉院御製に見られるように、

七月七日、二条院の御かたにたてまつらせ給ける　後冷泉院御製

あふことはたなばたつめにかしつれどわたらまほしきかささぎのはし（第十二恋二、七一四番）

七夕の夜牽牛と織女が逢う折り、鵲が渡す橋のことである。架空の場所であることもさることながら、これから一人山籠もりをしようという人間が男女の逢瀬に関わる橋のたもとで待つというのも滑稽である。あるいはここにも娘に対する師僧の秘めた欲望が揺曳していると見ることができるのかもしれない。

以上検討したように、師僧の書簡は淫靡な欲望を表出し卑猥な皮肉をものする、僧らしからぬ俗性に溢れている。こうした性質は書簡の冒頭近くの、

情けある御心とは聞きわたりて侍れば、かかる折だに聞こえむ

とてなむ。　（「よしなしごと」）

や、書簡の終わり近くの、

世の中にもののあはれ知りたまふらむ人は、これらを求めて賜へ。

（「よしなしごと」）

という慇懃無礼で屈折した物言いにも表れていよう。

四　物語末尾の位置づけ

次に、書簡を包む物語末尾を検討する。

〔イ〕つれづれにはべるままに、よしなしごとども、書きつくるなり。

〔ロ〕聞くことのありしに、いかにいかにぞやおぼえしかば、風の音、鳥のさへづり、虫の音、浪うち寄せし声に、ただ添へはべりしぞ。

（「よしなしごと」）

この部分、師僧の手紙の追伸と見るのか、もしくは書写者の跋文と見るのかで説が分かれる。[30] 結論から言えば、〔イ〕の一文と〔ロ〕の一文とは別に捉えてみてはどうかと考えている。

〔イ〕には、「よしなしごとども、書きつくるなり。」とある。この文言は物語冒頭の書写者の言、「書きてありける文の言葉のをかしさに、書き写して侍るなり。」に照応する物言いとして捉えられよう。[31]〔イ〕は、書写者が自らの行為をまとめた文言として解することができる。

一方〔ロ〕の中の「聞くこと」は、一文を跋文つまり書写者の言と捉えると「師僧が奇妙な書簡を女に送ったという噂」を書写者が聞いたと読め、師僧の言と捉えると「女が「故だつ僧」と懇意にしており、旅の具を用立ててやったという噂」を師僧が聞いたと読める。また、そのすぐ下の「いかにいかにぞやおぼえしかば」は、書写者の言と解すると「書写者が師僧に対して」思ったと読め、師僧の言と解すると「師僧が女に対して」思ったと読める。書写者は冒頭において「書きてありける文のことばのをかしさに書き写し」たと語っており手紙を実際に見たと考えられるので、末尾に至って師僧の例の噂を聞いて驚いたと設定され、ことさら「聞く」ことに注意が向けられているのは少し不自然に感じられる。「聞くこと」という文言からは師僧が聞いたと読む方が自然であると思われる。冒頭の「女の師にしける僧の聞きて」に、末尾の「聞くことのありし」が対応すると考える。

ところで、この師僧の言と思われる最後の一文には、「聞くことのありしに」、「おぼえしかば」、「浪うち寄せし声」、「添へはべりしぞ」とあり、過去の助動詞「き」が畳みかけるように用いられている。[32] 師僧が二人のよくない噂を聞いたことや、それを困ったことだと思ったことが、書簡執筆よりも過去のこととして語られているのは不自然ではない。がしかし、書簡執筆時点及びそれ以降に関わる、風の音以下の音声の描写（これらの音はのちに論じるように比喩的な意味合いでも用いられていると考える）や、その音声に添え

て書き送ったという行為までも、過去のこととして記述されている点は重要であろう。この物言いは、師僧が娘へ奇妙な書簡を送った自らの過去の行為に対して、時間をおき弁明しているように受け取れる。師僧の書簡は、冒頭及び末尾の一文〔イ〕で現れる書写者の語りによってまず縁取られ位置づけられたのち、それを目にした師僧の弁明、〔ロ〕によって再びその意味が問い直されるという、二重の虚構の枠組みを備えているのではないか。

師僧の文言と解した末文は、「いかにいかにぞやおぼえしかば」とあり、師僧の、娘と「故だつ僧」の噂への懸念の心情が読みとれる。それと、続く「風の音」以下の文言とはどのように関わっていくのか、その意味合いをさらに追求したい。

五　極楽の音の交響

「風の音」以下の文言は何を意味するのか。先行説として、「とりとめもないうわさ」・「よしない物」・「自然の声」等の読みが提出されている。[33] 平安から鎌倉にかけての用例を眺めることによって、考察してみたい。

「風」・「鳥」・「虫」・「浪」の音の組み合わせは、以下に掲げる『うつほ物語』「内侍のかみ」の巻に見出せる。

「それが不定なるにこそ、あはれなれ。よし、おもとにも、草木となるとも、この琴の音をそれに従へて、この遊ばすをば承りて、鳥の声にても承りてむ。草とならば、虫の声にても聞き、山とならば、風の音にても聞き、海・川とならば、波高き音にてもなむ聞かむ」とのたまふ。　（四三三頁）[34]

これらの音は、内侍のかみの琴の音色をよそえるものとして並べられている。

一方、「風」・「鳥」・「浪」の音の組み合わせは、次の『龍鳴抄』や『梁塵秘抄』に見える。

・『龍鳴抄』下、跋文（長承二年（一一三三）成立）

つれ〴〵なるまゝに。てならひの時々させる日記もひかず。そのしるしともなき事を。心にうちおぼゆるまゝにかきつけたり。（略）月のあかからん夜。よもすがらあそびてははらだゝしからんことをもわすれて。極楽浄土の鳥の声も。風の音も。いけのなみも。とりのさえづりも。これかやうにこそはめでたからめ。　（五七～五八頁）[35]

・『梁塵秘抄』巻第二、一七七番

（極楽歌　六首）

極楽浄土のめでたさは、一つも徒なることぞ無き、吹く風立つ波鳥も皆、妙なる法をぞ唱ふなる

『龍鳴抄』では「極楽浄土の」とあり、『梁塵秘抄』でも「極楽浄土のめでたさは」とあるので、極楽浄土の風景の一要素としてこれらの音が登場したと理解される。また、『龍鳴抄』は物語本文と同

じく「とりのさえづり」という物言いになっており、この表現は時代がくだるものの、以下の『正和四年（一三一五）詠法華経和歌』の詠歌にも見出せる。

夏日陪春日社壇詠阿弥陀経和歌

同　　散位従四位上藤原朝臣頼清

さまざまのとりのさへづりかぜのおときくもみのりの心をぞなす　（三五番）

これら、「風」・「鳥」・「波」の音が織りなす極楽描写の文言と通じるのが、次の例等であろう。

・『千載和歌集』巻第十九釈教歌、一二五二番

阿弥陀経の心をよめる　　平康頼

とりのねも浪のおとにぞかよふなるおなじ御のりをとけばなりけり

・『宝物集』巻第七

波の音、風の声は、みな仏道増進の妙文をとなへ、一切の草木はこと〴〵く沈檀の匂をなせり。（三四八頁）[36]

こうした表現の源泉と考えられるのが、以下に引用した『無量寿経』・『観無量寿経』の「八功徳水」を叙した部分、及び『阿弥陀経』の極楽の鳥の声や風の音を叙した部分、等である。

・『無量寿経』

内外左右、有諸浴池。（略）八功徳水、湛然盈満、清浄香潔、味如甘露。（略）波揚無量自然妙声。随其所応、莫不聞者。或聞仏声、或聞法声、或聞僧声。（一七八～一七九頁）[37]

・『観無量寿経』

次当想水。想水者、極楽国土、有八池水。（略）其摩尼水、流注華間、尋樹上下。其声微妙、演説苦空常無我諸波羅蜜、復有讃歎諸仏相好者。如意珠王、湧出金色微妙光明。其光化為、百宝色鳥。和鳴哀雅、常讃念仏念法念僧。是為八功徳水想、名第五観。（五四～五五頁）[38]

・『阿弥陀経』

復次、舎利弗、彼国常有、種種奇妙雑色之鳥。白鵠、孔雀、鸚鵡、舎利、迦陵頻伽、共命之鳥。是諸衆鳥、昼夜六時、出和雅音。其音演暢、五根、五力、七菩提分、八聖道分、如是等法。其土衆生、聞是音已、皆悉念仏念法念僧。（略）是諸衆鳥、皆是阿弥陀仏、欲令法音宣流、変化所作。舎利弗、彼仏国土、微風吹動、諸宝行樹、及宝羅網、出微妙音。譬如百千種楽、同時俱作。聞是音者、皆自然生念仏念法念僧之心。舎利弗、其仏国土、成就如是、功徳荘厳。（一三七～一三八頁）[39]

これらの音色は皆、法を説き明かす声としての機能を備える。以上の用例を眺めると、経文にその源流を持つ極楽の点景としての「風」・「鳥」・「波」の音をめぐる叙述は、文学表現の中にかなり広汎に浸透していたことがうかがわれる。師僧の言は、こうした「風」・「鳥」・「波」の音をめぐる伝統を踏まえた文言として解

せよう。

ただし『よしなしごと』の場合、これに「虫の音」が加わっている。「虫の音」は、文学世界において哀れを催す自然の音として登場することが多い。『源氏物語』桐壺巻では、愛する更衣を失った桐壺帝の悲しみが、

風の音、虫の音につけて、もののみ悲しう思さるるに、

（①、三五頁）

と語られている。『よしなしごと』は、極楽の法を説く音にこうした「虫の音」を取り混ぜ、少し戯れているのではないか。

末文に引かれた音は、自然の発する音であり、同時に極楽浄土の悟りに導く音のイメージを背後に湛えていると読みたい。よって、それらの音に書簡を添えたという師僧の言は、娘を取り巻く噂を懸念し、彼女を諫め彼女に悟りを促すために奇妙な書簡を書いたのだという、師僧の弁明あるいは言い訳として解することができる。書簡部分で俗を極めた師僧の真意が最後にあきらかにされることで、法を説く師僧の聖性が顔を覗かせ、物語の意味が逆転する。その聖性を盛り上げるのがこれらの音色であろう。なお、この末文は師僧自らのことばを記す体裁を採るので、それが正当な弁明であるのか、もしくは苦し紛れの言い訳なのか、その判断は読み手に委ねられる。真相は「藪の中」といった語りの構造になっているのではないか。

六　師僧による罪の諫めと「仏名」の時空

ところで、物語冒頭における時間設定は「年のはて」であった。師僧による罪の諫めというモチーフを当該物語の一面として読み取るなら、この時間設定とモチーフとの間には少なからず密接な関係が存するのではないかと考える。最後にこの点について述べる。

冒頭の「年のはて」という時間は、「故だつ僧」が山寺に籠ることになった時期を直接には指す。がしかし、その後出来した娘による「故だつ僧」への品物の調達、師僧による書簡執筆という事態をも統括する時間として機能していよう。一方、末文に流れる師僧の時間の現在は、これまで論じてきたように冒頭の時間とは一線を画すべきであるが、書簡執筆時を振り返りその時点における自らの行為の弁明をしていることから、師僧の「年のはて」の時間の再定義として解することができるだろう。

この「年のはて」とは、一体いかなる時間として平安から鎌倉にかけての人々に認識されていたのか。年中行事という観点から眺めると、仏名の存在が注目される。周知のように仏名は、過去・現在・未来の三千の仏の名を唱えて、その年の罪業を懺悔し消滅させる法会である。『三宝絵』は、仏名を十二月の仏事として掲げている。[40] 承和の頃以降、仏名は恒例の行事となり、導師を招いて宮中でも貴族の家でも催された。例えば、『御堂関白記』の長和元年（一

〇一二）十二月の記述を見ると、二十四日条に「内裏御佛名」[41]、二十七日条に「今夜中宮・春宮御佛名」とある。

年中行事の仏名がはじめて勅撰集の主題として採用されたのが、『拾遺和歌集』冬歌の巻末近くである（巻第四冬、二五七～二六〇番）。例えば、

屏風のゑに、仏名の所　　よしのぶ

おきあかす霜とともにやけさはみな冬の夜ふかきつみもけぬらん

延喜御時の屏風に　　つらゆき

年の内につもれるつみはかきくらしふる白雪とともにきえなん

（二五七・二五八番）

とあり、罪業消滅を詠んだ歌が多い。これらの歌が屏風歌であった点も注目される。また、『和漢朗詠集』にも冬の景物として「仏名」がとりあげられている（巻上冬・仏名、三九三～三九六番）。仏名は、歳末の行事として人々に認知され定着していたといえよう。『源氏物語』では、紫の上の死後、彼女を思慕しつつ一年を過ごす光源氏の姿をかたどった幻巻の巻末近くに、年の終わりの仏名の記事が見える。

御仏名も今年ばかりにこそはと思せばにや、常よりもことに錫杖の声々などあはれに思さる。行く末ながきことを請ひ願ふも、仏の聞きたまはんことかたはらいたし。雪いたう降りて、まめやかに積もりにけり。導師のまかづるを御前に召して、盃など常の作法よりも、さし分かせたまひて、ことに禄など賜す。

（④、五四八～五四九頁）

人生最後の仏名になるであろう、と思うゆえか、源氏の感慨は深い。導師への禄なども格別に与えた。出家の志を抱き人生の区切りを間近に控えた源氏が、年中行事の一つであり形式的色合いの濃いものとはいえ、一年の終わりにその年を振り返る場にあることからは、ひときわ述懐的趣きが漂う。月次屏風や和歌・漢詩の世界で醸成されてきた仏名の時空を、物語は有効に活用しているといえよう。

以上見てきた仏名の文学的空間が、『よしなしごと』にも別のかたちで影を落としているのではなかろうか。当該物語の「年のはて」という時間の設定、及び師僧による罪の諫めの文脈の形成の背後には、罪業を懺悔し消滅させる歳末恒例の仏名の世界が横たわっているのではないかと考える。

おわりに

『よしなしごと』の書簡部分とそれを包む枠組みとの関わりの検討を通して、当該物語の考察を試みた。師僧のものした書簡部分からは、娘と「故だつ僧」への揶揄や師僧の屈折した欲望が読みとれ、僧らしからぬ俗性を看取することができる。それを位置づける役割を持つのが、書写者の言とこれを受けた末尾の師僧の言である。書写者が冒頭において「文の言葉のをかしさ」に注目し、「似つかず、

あさましきことなり」と揶揄し、末尾において「よしなしごとども」と評したのに対し、師僧は書簡執筆の理由を娘を諭すためであったと弁明する。後者からは師僧の聖性が立ち現れてくる。それぞれの言は、この書簡の一面の性質を言い当てていよう。が、それが客観的な真実である保証はなされていない。書簡は勿論のこと、それを包む書写者の言も師僧の言も対象化する位置にこの物語の語りの地平はある、と考える。

末尾は、この物語にいわば落ちをつけるために機能している。堤中納言物語を眺めると、末尾に意外な結末を用意し読者を驚かせる様式を備える作品として『花桜折る少将』や『はいずみ』等が見出せる。『よしなしごと』の末尾は、こうした短編物語に共通する手法という観点からも捉えなおすことができよう。

ところで、題名は「よしなしごと」であった。これは、直接には末尾の書写者の言「よしなしごとども、書きつくるなり」を踏まえた文言である。そこには少なからず書写者の謙遜が含まれていよう。ただし、題名はこの書写者の評をも越える物語全体を統括する視点から発せられた文言でもあったのではないか。以上指摘した引用と語りの趣向を用い、壮大なことばの戯れを演出した、この虚構の物語全体を言い表す文言であるとも考える。作者はこの企てに「よしなしごと」という自嘲のことばを冠した。しかしそれは同時に自負のことばでもあったように思う。

〔注〕

(1) 雨宮隆雄「堤中納言「よしなしごと」考―其の虚構に拠る笑の趣向に就いて―」(『平安文学研究』第四一輯、六八年一二月)、寺本直彦「堤中納言物語「よしなしごと」は平安後期の成立か―『和泉往来』との関係など―」(『青山語文』第一一号、八一年三月。のち、同著『物語文学論考』九一年、風間書房、所収)、他。

(2) 雨宮氏は注1の論文において、「それは、「女」を窘めようという意図と共に、(略)「故だつ僧」に対しての非難をも込めたものであったかも知れない。」と述べた。

(3) 小峯和明「よしなしごと」(三谷栄一編『体系物語文学史』第三巻、八三年、有精堂)。

(4) 神田龍身「よしなしごと(物語の視界50選)」(『国文学解釈と鑑賞』第四六巻第一一号、八一年一一月)。

(5) 三谷邦明「物語文学の極北―堤中納言物語『よしなしごと』の方法あるいは終焉の祝祭―」(『横浜市立大学論叢』八六年三月。のち、『物語文学の方法Ⅱ』八九年、有精堂、所収)。

(6) 小森潔「ゲーム―言語ゲームとしての『堤中納言物語』「よしなしごと」―」(『物語研究会編 新物語研究1『物語とメディア』九三年、有精堂)。

(7) 堤中納言物語の引用本文は、宮内庁書陵部蔵本(『影印本堤中納言』、笠間書院)を底本とし、他本により私に校訂したものを用いる。なお、引用本文には適宜傍線を付した。

(8) 清水泰著『堤中納言物語評釋』(二九年、文献書院)→【清水、評釋】、松村誠一校註 日本古典全書『堤中納言物語』(五一年、朝日新聞社)→【松村、全書】、寺本直彦校注 日本古典文学大系『堤中納言物語』(五七年、岩波書店)→【寺本、大系】、松尾聰著『堤中納言物語全釈』(七一年、笠間書院)→【松尾、全釈】、稲賀敬二校注・訳 日本古典文学全集

【堤中納言物語】（七二年、小学館）→【稲賀、全集】、土岐武治著『堤中納言物語の注釈的研究』（七六年、風間書房）→【土岐、注釈的研究】、三角洋一全訳注　講談社学術文庫『堤中納言物語』（八一年、講談社）→【三角、学術】、池田利夫訳注　対訳古典シリーズ『堤中納言物語』（八八年、旺文社）→【池田、対訳】、大槻修校注　新日本古典文学大系『堤中納言物語』（九二年、岩波書店）→【大槻、新大系】、稲賀敬二校注・訳　新編日本古典文学全集『堤中納言物語』（二〇〇〇年、小学館）→【稲賀、新編全集】、注1雨宮論文、他。以下、注釈書名は略号にて記す。

(9) 山岸徳平著『堤中納言物語全註解』（六二年、有精堂）→【山岸、全註解】、山岸徳平訳注　角川文庫『堤中納言物語』（六三年、角川書店）→【山岸、角川】、塚原鉄雄校注　新潮日本古典集成『堤中納言物語』（八三年、新潮社）→【塚原、集成】、注5三谷論文、他。

(10) 諸注釈書、注3小峯論文、注5三谷論文、他。

(11) 濱千代清氏は「よしなしごと」（山岸徳平編　日本古典鑑賞講座『堤中納言物語』五九年、角川書店、所収）において、「宛先の女が恋愛しているのを意識した語句を抜いてみることにします。」とし、本文中の文言を抜き書きしている。

(12) 「恋麿」説は【清水、評釋】、【松村、全書】、【寺本、大系】、【松尾、全釈】、【土岐、注釈的研究】、【塚原、集成】、【池田、対訳】、【大槻、新大系】、他。「乞麿」説は【山岸、全註解】、【山岸、角川】、【稲賀、全集】、【三角、学術】、【稲賀、新編全集】、他。

(13) 増補史料大成（臨川書店）に拠る。

(14) 新編国歌大観（角川書店）。以下、特に断らない限り和歌の引用は同書に拠る。

(15) 【塚原、集成】が、当該【萬葉集】歌を頭注に引用している。

(16) 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『萬葉集　本文篇』（六三年、塙書房）に拠る。

(17) 「よしなしごと」の成立については、平安時代後期から末期、降っても鎌倉時代初期あたりであろうと考えている。

(18) 諸注釈書により、すでに指摘されている。

(19) 諸注釈書により、すでに指摘されている。

(20) 【寺本、大系】及び【塚原、集成】が当該歌の存在を指摘しており、特に後者は積極的に関連を読み取っている。

(21) 諸注釈書により、すでに指摘されている。

(22) 橋本不美男校注・訳　日本古典文学全集『歌論集』（七五年、小学館）に拠る。

(23) 小林芳規・武石彰夫校注　新日本古典文学大系『梁塵秘抄』（九三年、岩波書店）。以下、『梁塵秘抄』の引用は同書に拠る。

(24) 【山岸、全註解】では、「やもめは、後家即ち寡婦。寡婦のあたりのいり豆。熬（いり）豆は女陰の異称である。よしなし事を、面白くふざけて書いたのであるが、表面には、食物たる「いり豆」と言って居る。」と説明する。同様の見解が【塚原、集成】、注3小峯論文、注4神田論文、注5三谷論文に見え、【稲賀、新編全集】も「急に卑猥な連想へ飛躍したおかしさ」とする。【三角、学術】は紹介するにとどめる。

(25) 重松明久校注　古典文庫『新猿楽記・雲州消息』（八二年、現代思潮社）に拠る。

(26) これから山籠りして修行しようという僧が酒の肴を所望するおかしみも、あるいは読み取ることができるのかもしれない。

(27) 武田祐吉校注　日本古典文学大系『祝詞』（五八年、岩波書店）に拠る。なお、この用例の指摘は【寺本、大系】、他に見える。

(28) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳　新編日本古典文学全集（九四年～、小学館）。以下、『源氏物語』の引用は同書に拠る。

(29) 源氏物語古註釈大成　第六巻『河海抄・花鳥余情』（七八年、日本図書センター）に拠る。

(30) 師僧の手紙の追伸と見るのは【清水、評釋】、【三角、学術】、【塚原、集成】、【大槻、新大系】、注1雨宮論文、注5三谷論文、注6小森論文、他。跋文の場合の解釈も並記しつつ、追伸説をとるのが【寺本、大系】、【松尾、全釈】、【稲賀、全集】、【稲賀、新編全集】、他。一方、書写者の跋文と見るのは【山岸、全註解】、【山岸、角川】、注3小峯論文、注4神田論文、他。【池田、対訳】は、師僧の追伸の場合の解釈も提示しつつ跋文説を掲げる。

(31) 【稲賀、新編全集】は注30に掲げたように、「以下（私注、「つれづれ」以下の本文）は僧の手紙の追伸」としながらも、当該本文について、「以下は消息文を写した人の跋文で、冒頭の「書き写してはべるなり」に照応するか。」と述べた頭注を付し、跋文の可能性をも示唆する。

(32) 平成十二年度広島大学国語国文学会秋季研究集会において同題で口頭発表した際、妹尾好信先生より、当該本文における過去の助動詞「き」の使用等を根拠に師僧の「あとがき」ではないかとの御教示をいただいた。

(33) 「とりとめもないうわさ」（【寺本、大系】。同様の意見が【松村、全書】、【松尾、全釈】、【稲賀、全集】、【塚原、集成】、【大槻、新大系】、【稲賀、新編全集】、注5三谷論文、他に見える）、「一般的には、よしない物」（【山岸、全註解】、【山岸、角川】）、「自然にお耳に達する声」（【池田、対訳】）、「哀れを催す自然の音（情景の重なる）と聞えて来る噂とを懸けてゐる。またこれらの音と、この消息が縁語をなしてゐる。」（【土岐、注釈的研究】）、「日頃人が耳にし心を慰めるものの譬」（注1雨宮論文）、「いずれも自然がかなでる音楽をいう。うたいものにしてはやしたて、いましめようという気持か。」（【三角、学術】）といった説明がなされている。

(34) 室城秀之校注『うつほ物語　全』（九五年、おうふう）に拠る。

(35) 『群書類従』第一九輯（三二年、続群書類従完成会）に拠る。

(36) 小泉弘・山田昭全校注　新日本古典文学大系『宝物集』（九三年、岩波書店）に拠る。

(37) 中村元・早島鏡正・紀野一義訳註　岩波文庫『浄土三部経（上）』（六三年、岩波書店）に拠る。

(38) 中村元・早島鏡正・紀野一義訳註　岩波文庫『浄土三部経（下）』（六四年、岩波書店）に拠る。

(39) 注38の前掲書に拠る。

(40) 『三宝絵』下巻・十二月・僧宝の三二・仏名に、「仏名は、律師静安が承和のはじめの年深草の御門をすすめたてまつりて、はじめ行はせ給ふ。後にやうやくあめのしたにあまねく勅を下して行はしむ。（略）」（出雲路修校注　東洋文庫『三宝絵』九〇年、平凡社、一七四頁）といった記述がある。

(41) 山中裕編『御堂関白記全註釈　長和元年』（八八年、高科書店）に拠る。

〔付記〕本稿は、平成十二年度広島大学国語国文学会秋季研究集会（平成十二年十一月二十六日於広島大学）における口頭発表をもとにまとめたものである。席上及び発表後、諸先生方より貴重な御教示を賜った。ここに記して心より御礼申し上げる。

—いのうえ・しんこ、大谷女子大学非常勤講師—